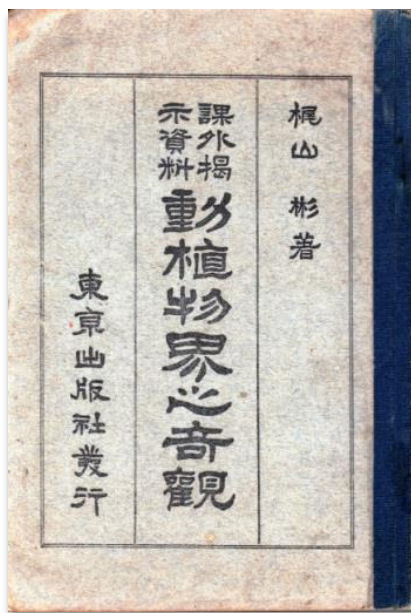




鹿沼の自然・栃木の旅

月報第30号

(2015年1月)



『動植物界の奇観』
詳細は4頁から

北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼



茶臼山・毘沙門山ハイキングと
今市宿・二宮尊徳に因む社寺史跡めぐり

今市から鬼怒川温泉方面に向かう時、大谷橋を渡って左手に見えてくるのが茶臼山と毘沙門山（586m）です。倉ヶ崎新田の「茶臼山ハイキングコース入口」の駐車場に車を置いて茶臼山を越え、二等三角点のある毘沙門山を越えて県道に下ります。大谷橋のたもとまで歩いて、日光杉並木の一つ、会津西街道（旧道）を歩いて駐車場に戻ります。

車で上今市駅の近く、杉並木公園に移動します。公園内には日光東照宮に参詣した朝鮮通信使の宿舎礎石を残す今市客館跡の他、1830年建設の江連家住宅、1865年建設の報徳仕法農家の2棟が移築・復元されています。勝道上人が日光山内の滝尾神社と同時にまつたものと伝えられる滝尾神社、二宮尊徳を祭神とし、その遺徳をたたえて創建された報徳二宮神社に参詣しましょう。尊徳は各地で報徳仕法とよばれる農村復興事業を行いました。幕命により日光神領の仕法を開始、1854（安政元）年に開鑿されたのが用水路二宮堀です。今市高校正門前付近が見学しやすいとのこと。



日 時：1月18日（日）AM7:00 北小西門集合（解散はPM4:00頃）
行 程：鹿沼 AM7:15—7:45 茶臼山ハイキングコース入口[㊦]（20分）……
茶臼山（35分）……十字路（45分）……毘沙門山（40分）……
県道青柳今市線分岐（45分）……国道交差点（30分）……
茶臼山ハイキングコース入口[㊦]——杉並木公園[㊦]……
滝尾神社・報徳二宮神社・如来寺など……杉並木公園——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴
持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート
必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、ストック、

参考書（栃木の山 150、栃木県の歴史散歩、とちぎの社寺散歩）、
1/25,000 地形図は「今市」「鬼怒川温泉」

参加費：ガソリン代等 おとな 400 円、子ども 200 円、

今年度初参加の方は保険料 800 円（3 月まで）

問合せ：電話 090-1884-3774（阿部）

次回予告

田沼、唐沢山より諏訪岳ハイキング
～国史跡、唐沢山城跡を訪ねて～

2月15日（日）（詳細は追ってお知らせします）



本号の内容

山行案内	茶臼山・毘沙門山ハイキングと今市宿・二宮尊徳に因む社寺史跡めぐり・・・	2
次回予告	田沼、唐沢山より諏訪岳ハイキング～国史跡、唐沢山城跡を訪ねて～・・・	3
表紙の本	梶山 彬著『課外掲示資料・動植物界の奇観』・・・	4
	緒言	
	動物篇「鮫鯨の計略」「戦闘用としての象」	
	植物篇「酒の湧き出る植物」「虫を捕食する植物類」「植物の記憶力」	
	目次	
活動報告	真岡鐵道沿線、小さな旅・・・	14
探訪・鹿沼の鎮守と古木①	入粟野出口のサイカチと日光神社・・・	18
山書談話室	・・・	20

梶山 彬著『課外揭示資料・動植物界の奇観』

(大正6年2月15日・東京出版社発行)

緒 言

世の中には解り切ったようでいて、実は解らぬことが沢山にあり、又その事は知り抜いているようであっても、真に知らぬことが続々と出て来る、のみならず、往々にして錯を將^もって錯に就き、而かも自ら覺らざることが決して少なくない、固より専門に属する深奥なる学理等に関して常人の之に通ぜざるは無理ならぬことであるが、普通日常に会合する事物に関してすら、輒もすれば僅に皮相を見て之に安んじ、少しく内容に立入るときは、直ちに刀を迎えて解決を与うる者は甚だ稀である、例えば、鯨は魚でない、獣であるといい、果物の未熟のものは何故に毒であるかと訊かれると、只眼を睜^みはって居るような類が即ち其れである。

併しそれは深く咎むるのが無理かも知れない、何故なれば、見渡す所夫等の知識を吸収して居る階級は極めて僅少なものであって、他の多くは之が恵沢に浴して居ないように見受けられるからである、苟くも其の多数にして之が知識を獲得するの機会だに接せば、必ずや能く咀嚼し消化して、啻に未然に之が危害を防ぐのみならず、須^{すべ}らく造化の妙工を看取し、忽ち捕捉し来りて或は善用し或は利用し、若くは些の人為を加えて更に其物の真価^{ますます}をして倍々發揮せしむることが出来るのである、一たび此の如くなるに至らば小は以て一身一家を利し、大は以て国家社会に多大の貢献をなすを得るのである。

本書は此の意味に於て成るもので、決して空疎にして一場の笑柄に供せんが為では無く、収むる所は悉く確実なる科学の知識に淵源して居るのであるから、読過するに従って趣味と実益とを合せ獲らるることを信じて疑わぬのである。

大正六年二月

著 者 しるす

動物篇 一 あんこう 鮫鱈の計略

鮫鱈のことに就て「泉州府志」に、あんこう 華臍魚は腹に帯ありてもすそ 帔の如く、子生じて其上に附く、故にしゅうぎょ 綬魚と名く、其形科斗おたまじやくし の如くにして、大なるものは盤の如しと云い、こんとぶ 呉都賦に、此魚は鱗なくして琵琶に似たり、故に又琵琶魚と名くと云い、和漢三方図会に、按ずるに此れ東海皆多くあり、西南海には少し、十月初めて出ず、最も之を賞す、三月以後稍稀なり、夏秋は全く之れなし、まろ 状団く、ひらた 扁くして盤の如し、肉厚くはら 肚大なり、背黒く腹白し、眼と鼻とは上に向い、口は潤大にしてりゆうき 鬣髻は短くして弱し。骨も亦極めて軟かにして、尾にまた 岐なくして長し、しろう 臙となして之を食う、味い淡甘なり、惟胃と頭とを去り、余は皆食う可し、以て上饌じょうせん となす、之を割くに法あり、呼んで釣切という、其法は縄を以て下唇に貫き、屋梁に懸け、水をロリ入ること五六升ばかり、水の口より溢るるを度となし、先ず頭喉けいこう の外皮を切りて、次に周辺の皮を剥ぎ、還つて髻及び肉を割き、胆を取り腸および骨を割き、刀を以て胃袋を刺すときは、畜水迸り出ず、若の法の如くならずして之を割くときは、肉は皮骨を離れずと見えて居るが、その割き方は兎も角として、魚屋の店頭いさや に吊されている状は甚だ見好くないものである。

此魚は却々なかなか の計略家であるが、それを語る前に形態を知らねばならぬ、乃ち体長の大なるものは約五尺にも達するのであるが、其の体形は扁平であつて、頭部は頗る大きく、口は網大で、下顎ちゆうだい は上顎よりも稍前に出て両顎にある円錐形の歯は内方に向つて居る。鼻の孔けう というものはなく、眼は割合に小さい。而して胸腹の両鰭は幅広く、殊に腹鰭の如きは左右によりて掌状を呈して居る、頭上には細長い骨質の弾性刺三本ありて、第一刺の先端には小さき弁膜を有し、脊鰭は三棘九刺より成り、しりびれ 臀鰭は七刺より成立つて居るが、体面は平滑であつて鱗はない、背部は褐色をなし腹部は白色を呈している。

右の如き体形をして、常に陸地に近き海底の沙中や岩礁などに潜んで居る、骨格はあれども柔軟なるが為め、他の魚族のように活発に游泳することが出来ない、そこで両の腹鰭でソノソノほこう と匍行しているのであるが、き 偕てこれでは充分に餌を獲ることが出来ないから、そこで彼は計略を施し頭上にある弁膜を有する刺をヒラリヒラリと常に動かして居ると、



アンコウ

(次ページへ続く)

小魚は其れを何か餌が浮動して居るものと誤認して近づいて来る、その時彼は潤大なる口を開いて之を一気に呑み去るのである、何と狡獪な遣方ではあるまいか、此魚は南日本に多く、北は函館の近海より南は長崎にまで拡がり、尚お支那近海までも産するのである。

尚お是には黄鮫鰯と称する一種があって、地方によりては雄魚を「まあんこう」、雌魚を「みづこ」と呼ぶ所もある、而して此者は多く函館より松島を経て紀伊の沿岸に分布して居る。

七 戦闘用としての象

現今吾邦は勿論、欧米各国に於ては互に皆軍事上の改良に意を注ぎて、武器の発明より軍隊の組織に至るまで、日に月に進歩改善せらるるものが多いけれども、之は其道の人でなくては容易に其の真髓の解るもので無い、左れば同じ飛行機を作り、之に乗るにしても、軍用と常用では大に趣を異にして居る、併し夫等文明の利器を用いる軍隊は別として、爰には珍奇に属する英領印度に於ける戦象隊ともいべき者のことを語ろう。

印度に於て巨象を戦闘に使役し来りしことは、既に古代の歴史上に明かなることであつて、乃ち紀元三百二十六年「ハイダスペース」の戦役に於て、「マセドニヤ」王アレキサンダーアレキサンダーの印度ポーラスと会戦せるの際、ポーラス王は戦象隊を真先に進めて前進したるに、亜歴山大王の軍は之が為に一時全く潰走したのである、亜歴山大王の率いる軍隊の特長は、もと騎兵を以て突貫するにあるので、殊に今回大王は、「バルジャ」及び「バクトリヤ」地方より精鋭なる騎共と、駿逸なる阿剌比亚馬とを引率して来たのであるから、ポーラス王との会戦には必勝を期して居たのである、而かも料らざりき前代未聞の戦象に遭遇して、脆くも失敗を招いたのである。けれども流石に機智軍略に富める大王は、其の宜しきを制して遂には勝敗其地を転倒したけれどもたとい一時たりとも其の鋭鋒を挫かれたのは、全く馬匹の天性が巨象の臭気を厭いに由るものである、元来馬が象に対する時は、未だ其の形影が眼に触れないでも、既に前方に巨象のあることを知覚した時は、最早一步も前へ進むもので無い、殊に一たび巨象の咆哮を聞くときは、馬は皆前足をあげて棒立となり甚しきは後しりえに撞着して毫も突進の用をなさぬものである、それ故に騎兵は戦象に対しては毫も効力がないにも

(次ページへ続く)

拘わらず、大王が能く戦象隊を破ることを得たのは、全く軽歩兵と長槍隊の突貫をな
さしめ、臨機の作戦計画を施されたに基くのである。

現今英領印度に於て使役する戦象は、昔時ポールス王の頃に使役したるものとは
大に其の趣を具にし、主として砲隊の編制に使役せらるるのである。此の戦象隊の
編制は、恐らく世界に於て其比を見ざる所のもので、其の動作の機敏にして、能く軍
規を遵奉することは驚くの外ないのである。

戦象は平時よく訓練されるので、それには戦象一頭につき各一人のくそつ駆卒があり
て、一頭毎に煉瓦造りのこや小舎に繋がれ、各勤随簿がありて朝夕監督将校の検査を
受け、起臥進退等は毫も一般の兵卒と異ったことは無い、而して毎朝定刻になれば、
戦象は喇叭の響に應じて各々小舎より出で来りて、広庭の内の各自が指定せら
れたる場所に至り、地上三尺許りのい杓に、自ら鍵鎖を以て自己の前足を縛りつけ、
少しも駆卒の補助を仮らずして二列に整列し、そして将校の至るを待つて居る、此くて
将校が至れば、彼等は一斉に長い鼻を挙げて敬礼する、其の動作は如何にも規律
正しくして、却って一般兵卒の不規律に

して懦弱なるものに優つて居る、既に点
検が終り、上れの号令と共に、戦象は
其鼻を前方へ突出し、駆卒が其上に
乗るや、次第に鼻を高めて駆卒が自
分の背上に昇るに容易ならしめ、次で
進めの号令により、順次列を正して食事
場に至る、駆卒は背上より降りて食事
を用意し、一斉に食事をなさしめる、而して
日常は砲車及び弾薬車行進の運動をなし、
能く将校の号令を弁別して、其の指揮に
従いて運動し、又或ば種々の重量物の
運搬用をなして雑役に従事する、尤も
中には折々不規律のものありて、軍規
に触れる者もあるが、是等はそれぞれ
軍規によりて処罰せられるので、軽い



ものは減食位であるが、罪状の重いものは太い鉄製の鉤で打たれる、斯る場合に於ても、彼等は毫も之に抵抗すること無く、甘んじて其刑に服する者のように見受けられ、其状は実に憫むべく、又賞すべきものがあると云う。

夏季に至れば、毎週二回河流に至りて水浴するのが常規である、最も彼等は性来水に入ることを好むものであるから、嬉々として河流に入り、恰かも小児が遊戯に耽るようである。けれども矢張り規律は厳然として、毫も列を乱すなどの事なく、互に交代して河流に入りて水浴をなす様は、実に感服すべきものである、又期日を定めて其爪を切るに当りても、能く指揮者の号令に服従して、温順に横臥して為すが儘に委せ、柔順にして能く規律を守って居る、併し時としては団結して命令に服せず、頑として動かない事もあるが、此の如き場合は多くは将校が無理な命令を下すが為であって、其の命令を変じて正當にさえずれば、彼等は掌を反すが如く其の命令を遵奉するのである。

此く象なるものは馴らしようで人類の為に柔順に、誠実に貢献するのである、是につけても人類の或者は大に愧ずべきではあるまいか。

植物篇 二 酒の湧き出る植物

我が新領土の南洋諸島には、「ブレード・ツリー」即ち麵麴樹パンノキと称するものがある、往古我国でも元正天皇の御代に、孝子が瀑布の水を汲んで来て其れを老いたる父に侑すすめると、それが酒の味をした、此事が遂に当時の天聰に達し、年号を養老と改め、其の孝子を厚く褒賞あらせ給いしというが、今は手で掬すくって舐なめて見ても淡水である、徳利を洗すすいだ程の酒の香もない、それは成るべく稼まみず、遊んで酒食をしようとするから、天は盈みつを欠きて謙に益するの道理で、つまり横着者を天が誡いめ給うのである。

然るに爰に北米メキシコの墨西哥リュウゼツランには龍舌蘭という大きな草があって、それから芳ばしき液の酒が採れるのである、此の龍舌蘭というは頗る多肉質の巨大な葉を有って居って、草木類では世界中で最も大なるものと謂われて居る、此草が成熟すると、葉は地面に向って曲り、その株の中心から長さ約三十尺もある驚くべき



リュウゼツラン

(次ページへ続く)

花梗が出て、その頂には数千の白い花が奇観を極めるのである。

所で、墨西哥人は此の花梗が伸出でんとする時を見計って花茎に穴をあけ、其所から泌み出る液汁を酌取って、連れて来た驢馬の背中の皮袋に貯え、そして之を醗酵させたものが即ち墨西哥名物の「ブルク」酒である。

此の「ブルク」酒は甘くして、その上一種の粘り気があって、恰かも「サイダー」のような味とする、尤も是から強い「ブランデー」も作ることが出来るのであるが、何分にも獣肉の腐ったような悪臭があるので堪えられない、それゆえに新来の歐洲人は、一旦は此の臭気に易するのであるが、やがて其れに慣れて平気になれば、他の飲料よりも必ず此の「ブルク」酒を択び採るようになるということである。

六 虫を捕食する植物類

草木の類はたとい一年の中に生えたり枯れたりしようとも、又何年も生い伸びて行くものにしても、生きて居ればこそ育って伸びて行くとはいへ、彼の動物のように自分で自由に甲所から乙所へ移るということは出来ない、その種子は別として、一定の場所に生い茂って居る植物は、人の手を仮らなければ場処を変えることの出来ないことは万人の認むるところである、加之ならず、草木自身で幹や枝を動かし得るものでも無い、矢張り人力とか風力とかを藉りて動揺せられるのである、尤も或る一二の草木の花や葉は、朝は開きて夕方に至れば閉ずるものも無いではない、けれども自分の滋養を採らんが為に、或物が其の枝葉などに触れると同時に、それを感じて直ちに一種の作用を發して之を捕食するというに至りては、実に我等と同じく一種の神経作用があるかと疑わるるばかりである、是をして若し知識の低い昔であらしめたならば、或は化物草とか、若くは神が憑って居るのである杯というような伝奇を生んだのであるが、文明の有難さには以下のような事実が解って居るのであるから、順次に之を説明しよう。

こうしんそう
庚申草

コウシンソウ

庚申草は往年下野の庚申山に於て、植物学者の爲めに始めて発見せられたので、此は命名せられたのであるが、もと狸藻科に属する高山植物であつて、多くは岩窟等に自生して居る食虫草で、葉は長い倒卵形をなし、多肉にして叢生し、表面から粘液を分泌



(次ページへ続く)

して居るので、虫類が之に触れば、直ちに其れが為に捕えられる、即ち粘着してうと、それを或る作用で分解して養分を吸収するのである、夏季に至れば叢間より花茎を抜き、其頂に稍董に似たる一花が咲く、全形は「むしとりすみれ」に似て居るけれども、稍小さく且つ花梗は間々分岐して居る。

むしとりすみれ
虫取董

虫取董は狸藻科に属する高山に自生するところの食虫植物であって、高さは三寸許りで、よく観賞用に供せられるが、葉は長い卵形をなし、全体が緑色であって叢生するのであるが、此の葉面には細な腺毛がありて粘液を分泌して居る、若し小虫が此の葉面に触れば、葉の縁辺が漸々内部へ巻きて虫を包み、そして矢張り分解作用によりて養分を吸収するのである、花は稍董に似て居て、青紫色で不整齊にして距がある、毎年七月頃、花茎に単生するのである。



ムシトリスミレ

『サラセニア』

『サラセニア』の原産地は北アメリカであって、これは池や沼などに自生する所の多年植物で、其葉は変形して、恰かも長い瓶子状をなし、その瓶子の上部には大なる覆が具わって居る、而して瓶側には翼があるが、是は昆虫類が攀じ登って来るに都合の良い為である、瓶の内壁は滑沢であるから、一たび瓶の底に落ちた虫類は、最早再び外へ出ることが出来ないのみならず、此くである間に、内壁より是一種の消化液を分泌して、そして虫の体を分解して消化して自己の栄養に供して了うのである。



サラセニアの仲間
アミメヘイシソウ

もうせんごけ
毛氈藓

毛氈藓は茅膏菜科に属し、湿地に自生するところの多年の食虫植物であって、高さ六七寸ばかりで、葉は杓子形にして叢生し、葉身は円くて、縁辺や上面に多くの絨毛があり、且つ先端には太き毛状の突起がありて、其所から粘液を分泌する、小虫が一たび之に触れば、粘着して逃ることが出来ないのみならず、突起は次第に内に巻きて之を捕え、やがて粘液にて虫の体を溶解し、之を吸収して養分とするのである、その花期は夏で、花冠は白色に



モウセンゴケ

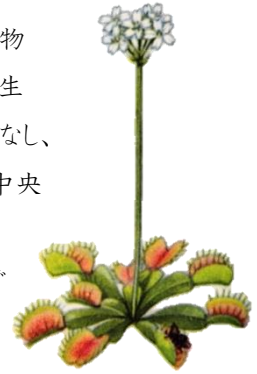
して五弁を有し、花柱は三個ありて各々二つに深く裂けて居る。

うっぱかずら
猪籠草

猪籠草は多年生の草木であって、その葉は長く大形にして対生し、その基部は扁平をなし、中部は糸状となり、末端は瓶子状をなすことは恰かも「サラセニア」に酷似して、矢張り瓶子の口の上に蓋の如きものがある、ただ其の形が小なるのみで、其の虫類を捕食する工合も亦「サラセニア」と同様である。

はえとりぐさ
蠅捕草

蠅捕草は一名を蠅地獄と称し、茅膏菜科に属する食虫植物であって、原産地は北米の「カロライナ」州で其所の湿原に自生する多年生の草木である、葉は叢生し、葉柄は長くて扁平をなし、葉身は稍軍扇状をなして居て、縁辺には剛毛が生じて居る、中央葉脈の両側には各三刺毛^{とげ}を有して居るが、若し小虫が之に触れるときは、急速に両側の葉身を閉じ合せて之を捕え、次で葉面より一種の液を分泌して之を溶解し、吸収して營養に供するのである、葉の叢間より茎を抜き出し、上部に白色五弁の数花が開くのである。



ハエトリグサ

三二 植物の記憶力

生物である以上は、植物にも亦動物と同じように生命がある、然らば動物の生命と植物の生命との間に相違があるかと云うに、是迄の所では生命を司る両者の原形質^{はつきり}に明確とした区別を立てることは如何しても出て来ない、つまり動物の原形質も、植物の原形質も、化学分析上では何等の相違がないということに学者は一致して居るのである。

是に於て動物に共通した感覚というものが、植物には絶対に無いものであろうかという問題が起って来るのである、所が、却々面白い、観察やら実験やらがある、進化論の開祖ダーウィン氏の三番目の子供で、矢張り有名な植物学者なるフランシス・ダーウィン博士その他二三の学者は、植物にも記憶力があるといふことを実験した。

夕方になると葉がペッタリと畳まって仕舞う、彼の睡木^{ねむりぎ}で実験して見ると面白い、博士は真暗な室へ四五日の間この木を入れて置いた、所が、実に奇抜なことには、

(次ページへ続く)

能く夕方と明方とを覚えて居るのか、必ず夕方になると葉が畳まって、明方になって復た開き初めた、そこで博士は之に説明を下して、葉の細胞の中にある原形質が、何時間ごとに此の動作を行^やるべきものだからと云うことを記憶して居るからだと言った。

レオナルド・バスチン氏は斯ういう実験を行った、植物は果して苦痛を感じないものであろうか、その結果は面白い、彼の睡木の葉は小さな葉が沢山に集まって一つの大きな葉になって居るのであるが、その小さな一つの葉の尖端^{さき}に、チョッと細いアルコールランプ酒精燈の焰を近づけた、実に一瞬間であったが、其の小さな一枚の葉ばかりでなく、それと並んで居る葉全体が、同じように苦痛^{いたみ}とでも云おうか、或は不快とでも云うべき感じを覚えたらしく、一様に縮んで仕舞った。

是迄の生理学者は、動物には神経組織があるが、植物には全く無いから、動物の感じる感覚なるものは植物には無いと言って居たが、余に言わせれば大に説がある、神経組織とは抑も何物であるか、一種の変形の原形質に過ぎないでは無いか、して見れば植物の細胞の原形質も低級な神経組織とも云える訳ではあるまいか、此く推論して来て見れば、植物には全く感覚は無いものであるとは言えない、それと同時に苦痛の感覚が無いものであると云うことも言えないでは無いか、とバスチン氏は語って居られる、成る程面白い実験である。

因に、睡木とは合歡木^{ねぶのき}のことで、是は豆科に属し、葉は二四羽状複葉であって対生し、夕方になれば萎^{しぼ}み朝に至れば伸びる、花は夏の頃開き、雄蕊が多数であって、下部に至りて一体と^{きや}な^て居る、果実は莢をなし、種子は米粒の如くで、観賞用として栽培せられ、またその材は種々の用に供せられる。



ネムノキ

参考図版：『日本水産魚譜』（内田老鶴圃）、『内外動物原色大図鑑』（誠文堂新光社）、
『原色牧野植物大図鑑』『原色少年植物図鑑』（北隆館）、
『原色植物大図鑑』（誠文堂新光社）、『学習図鑑シリーズ④植物の図鑑』（小学館）



今から 100 年近く前に出版された本ながら、生物界の興味深い事柄を多数取り上げ
 であるのでご紹介します。興味ある項をお知らせできれば、コピーを差し上げます。

『動植物界之奇観』目次

動物篇	27	舌の先で虫類を捕る動物	14	奇妙なる落花生の生
1 鮫鯨の計略	28	食用となる燕の巣		立
2 金石を呑む鳥	29	人魚の本態	15	花を食う野菜
3 人の体肉を棲家とする虫	30	魚らしき動物	16	葉になる果物類
類	31	横着なる小判鮫	17	蒔かぬ種子が生える
4 四角な卵を産む魚	32	軍用となる鴿	18	麦酒となる大麦小麦
5 盲目で墜道を穿る動物	33	人の口真似する鳥類	19	滋養分に富む豆腐
6 魚らしき獣	34	雌雄同体の虫	20	食料となる花
7 戦闘用としての象	35	蟾蜍は蜜蜂の大敵	21	奇効ある日本牛蒡
8 ありじごく	36	家禽界の貴族様	22	蟻の棲む植物
9 人の身振を真似する動	37	驚くべき兎の知恵	23	植物類は何を食する
物類	38	儂麻質斯を治す蜜蜂		か
10 喧嘩好きの魚	39	蚯蚓の功勞	24	夜分に咲く花
11 牛の木乃伊	40	蟹の知恵と記憶力	25	カーキ色染料の植物
12 空中を翔ける魚	41	麝香を持つ動物類	26	松脂の効用
13 沙漠の船	42	蛇と鼠を食う獣	27	鳳梨の三大効能
14 魚族の鱗は無色である	植物篇		28	馬鈴薯の滋養
15 食用となる蛙	1 悪魔払いの樹		29	無花果にも花がある
16 卵を産む獣	2 酒の湧き出る植物		30	団栗も食用となる
17 乳から五種の飲食物が	3 虫類を欺く植物		31	柚柑の新利用法
採れる獣	4 天気予報をする植物類		32	植物の記憶力
18 木に登る魚	5 植物の生長力		33	西瓜と腎臓病
19 海中の光る玉	6 虫を捕食する植物類		34	桑の皮は紙となる
20 装飾を好む蟹	7 植物と日光の七色		35	用途の広い熱帯の珍
21 雄の無情、メスの慈愛	8 植物種子の寿命		木	
22 舞踏好きな鳥	9 家屋を喰う菌		36	医的効果のある野菜
23 極めて夫婦仲の悪い虫	10 むだ花の効用		類	
24 立ち泳ぎする魚	11 算盤玉を造る樹		37	食べられる松の実
25 翼のない鳥	12 咳嗽をする植物		38	餅となり縄となる草根
26 鏡樹は動物	13 喰べる柿と見る柿		39	木葉が紅くなる理由

真岡鐵道沿線、小さな旅

12月21日(日) 天気・晴れ

総勢 13 名、寒さをものともせず北小に集まった一団は 2 台の車に分乗して出発。益子駅には発車時刻ぎりぎりに到着、予定のディーゼル列車に乗車できました。次の七井駅で下車し、これから歩く「風薫る山里のみち」を案内板で確認して出発。芳賀富士（大平山）を目指して歩き始めました。

行く道々、いくつかの「二十三夜塔」あるいは「二十三夜供養」と刻まれた石碑が見られました。佐々木茂氏によると、これは毎月定められた日に女性たちがお堂に集まって一晩を明かした女人講中であるとのこと。鹿沼では圧倒的に十九夜の碑が多いそうです。

安善寺に向かって登って行くと左側に棚田が見られます。芳賀富士の左裾を巻くように谷間があってその底面が田んぼなのです。佐々木氏によるとこれを谷戸と言うのだそうです。平野は川が氾濫するので昔の人は田んぼを作ることができなかった。そこで山と山に挟まれた谷間にのみ田んぼを作り、生活していたのだそうです。田んぼが平野に拡がり始めるのは灌漑技術の発展しはじめる江戸中期だそうです。

芳賀富士はシラカシやコナラの巨樹の立つ太古の森なのでした。おそらくこの山が中腹に立つ熊野神社の鎮守の森であり、古くから守られてきたからなのでしょう。山頂でお昼を食べ、下山して安楽寺に参詣し、目通り周囲 5.5m、樹齢 600 年以上というケヤキ等を見学して、茂木駅に到着。サントさんたちと SL (SANTA TRAIN) に乗って (!) 益子駅に戻り、帰路に着きました。



真岡鐵道サントトレインの前で

参加者

小川知峻・真司、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、平井亜湖・裕子、小島美穂、石崎隆史・裕子、阿部良司（計 13 名）

✿ 見た植物(50音順)

(草の花) オオイヌノフグリ、ホトケノザ、
(落葉樹) イヌシデ、ガマズミ (実あり)、クヌギ、
ケヤキ (巨樹)、コナラ、ヌルデ (実あり)、
ハンノキ (湿地に)、ミズキ、
ヤマコウバシ (枯葉つき、右写真)、ヤマザクラ (巨樹)、
(常緑樹) シラカシ (巨樹)、(針葉樹) アカマツ



ヤマコウバシ
冬でも枯れ葉の賑わい
(枯木ではありません)

✿ 見た鳥

アオジ、エナガ、コゲラ、ジョウビタキ、スズメ、セグロセキレイ、チュウサギ、ツグミ、
ハシブトガラス、ヤマガラ

✿ 参加者からいただいたおたより

真岡鐵道沿線小さな旅・感想文

そろそろ冬も深まってくる12月下旬、2014年最後の北光クラブに参加しました。今回は七井駅から安善寺・芳賀富士・安楽寺をへて茂木駅へと出る、アップダウンは少ないものの歩く距離は約12kmにもなるかなりの長さです。

6:40に益子駅へお出かけして出発し、8:05過ぎに益子駅に到着。列車は8:11発なのでかなりギリギリです。薄氷のはっている歩道橋をはしりホームへ入ったところでカーブのおこうから列車があらわれました。それに乗って1駅、3分ほどで七井駅に到着し、トイレに行き記念写真をとったあといよいよハイキングスタート！ 町の中をあるき観音院により道して山の方へとお出かけしました。

およそ2時間をかけて第1目的地の安善寺に無事到着しました。ここまで本当は40分(子どもの足なら1時間ぐらい)で歩けるので2~3倍もかかっています。このままではまずいので、芳賀富士まで20分のところをおよそ15分で登りそこでお昼。まだ10時台でしたが、場所がないのでしかたありませんでした。11時すぎに再び出発。次の目的地安楽寺へ。山道を歩き車道を歩きあぜ道を歩きして1時間半ぐらいで安楽寺着。時刻は12時半少し前。時間にかなり余裕があるのでこのあ

(次ページへ続く)

とは普通の速さで歩き道の駅もてぎへと裏道を歩き30分。ここで休憩。自分はた
 いやきを一つ買ってきて食べたあと茂木駅へむけてもうひとがんばり。沿線にはSL
 をまっている鉄道ファンのすがたもありました。2時ごろにぶじ茂木駅に到着しきっぷ
 を買った引込線にいるSLをとったりしているうちに酒店に行っていた阿部さんたちも
 到着しホームへ。普通列車出発のあとでSLが入線。内部はクリスマスのかざりつ
 けがされていてホームにはサンタがいっぱい。SLと記念撮影のあとでいよいよ出
 発。このSLではくばりものがいっぱいありました。記念乗車証にカップケーキなどな
 ど。そしてちゅうせん会では小川くん平井さんがSLじょうぎ。妹のちひろがSLカレンダー
 をあて、自分は最後の最後でスカイペリーを当てました。30分ほどでふたたび出
 発地点七井駅をへて益子へもどりました。今回のコースは足にふたんの多い道で
 したげけきのうつりかわりも多く楽しいコースでもありました。2015年もがんばりたい
 と思います。
 (佐々木伸二)

❁ 芳賀富士写真集



真岡鐵道先頭車両から見る
 車窓風景



真岡鐵道・七井駅にて
 ここから茂木駅まで
 さ～歩くぞ～



馬頭観音



真岡鐵道
 カラフルなディーゼル車両





二十三夜塔



山の中の祠



歩く、ひたすら歩く



目指す芳賀富士



谷戸の風景



安善寺でひと休み



安善寺本堂の彫刻のひとつ

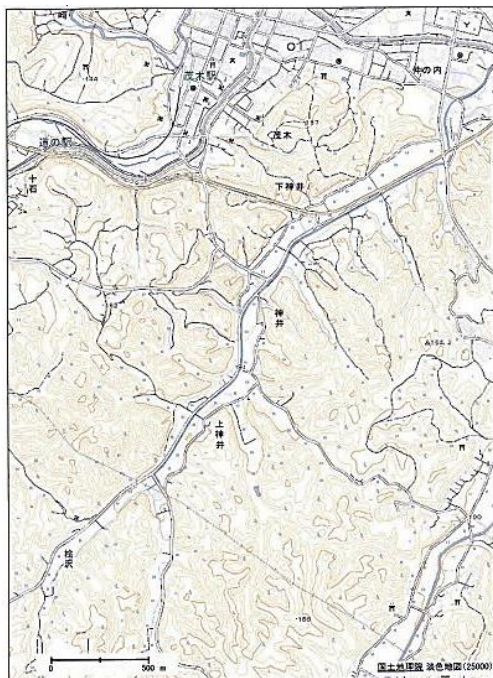


芳賀富士山頂にて
低くて“深い”山



山頂からの眺め

↓中央の谷から山に向かって谷戸が幾筋も展開している様子がわかる。茂木南郊。



山中のヤマザクラ

熊野神社のコナラ

安善寺の大ケヤキ



探訪・鹿沼の鎮守と古木①

入粟野出口のサイカチと日光神社

口粟野から粟野川に沿って横根山日瓢砒山に向かって進むと、両側の山が迫った所で入粟野に入り、道は大きく左にカーブする。道がまっすぐになって開けてくると、出口の集落である。畑の中を右に入る道があり、突き当たりに鳥居が見える。出口の鎮守、日光神社である。鳥居をくぐると正面に建物があり、雨戸が閉まっているので物置のようでもあるが、あるいは拝殿か。その建物の裏側に本殿がある。鳥居の右には庚申塔があり、奥には小祠が3基並んでいる。さらに奥に、スギとシラカシの古木がある。シラカシは胸高周囲 350cm。

粟野川沿いの道路に戻って、さらに横根山方面に向かって進むと左側の空地、粟野川の岸辺にサイカチの古木が立っている。斜め向側には酒屋さんの看板がある。サイカチの胸高周囲 310cm。細枝に枝分かれした刺が見られる。



サイカチの大木



粟野・出口集落の日光神社
右側にあるのは「庚申塔」

日光神社奥の石祠
背後に
シラカシの大木



見上げてみた→



日光神社本殿正面



こんな鳥いました
粟野にて
くりくりの目が
かわいい♡でしょ？

恒例、田部重治研究会・白坂正治氏からのおたよりです。

前略

2014年も残すところ3日。心のすす払いの手を休めて『月報第29号』楽しく読ませて頂きました。

月報中に取り上げておられる本は実に多様で、まさに読書案内のアンソロジーですね。そういえば国語の教科書もアンソロジーといえはアンソロジー。学びでは深淺はあれ一時でも田部重治の心奥を溯ることをしたのでしょうか、永続的な発展を聴けないのは残念です。この一年貴誌で田部文学を書影つきで御紹介下さり、真にありがとうございました。貴重な資料が増えたことを喜んでおります。

又、拙文の掲載、恐縮です。どうかよいお年をお迎え下さいませ。明年もよろしく
お願い申し上げます。 草々

2014年12月29日



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第30号

2015年1月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

